

『海外赴任のために必要なこと―駐在員家族のメンタルヘルス』

■ 下野淳子 著

■ 角川フォレスト



日本企業の活動がグローバル化するにつれて、これまで日本でしか仕事経験のない社員でも海外赴任する機会が増えている。海外赴任には、単身赴任と家族帯同の2つのケースがある。単身赴任であれば、赴任者本人がしっかり

していれば何とかなるが、家族帯同の場合は、様々な問題に遭遇する可能性が高くなる。

海外に出ると、まずは言葉の壁から始まり、習慣や文化、生活環境の違いなど、日本の便利で安全かつ快適過ぎる環境に慣れた日本人にとっては、当惑することも多い。それどころか、メンタルに病んで帰国せざるを得ないケースもある。その一方で、考え方、やり方次第では、新しい世界や環境を積極的に楽しみ、人生をとっても豊かにすることもできる。

著者は、総合商社やメーカーなどで働く一方、夫の海外赴任に伴いイタリア、ドイツで駐在員妻の生活を経験している。そのような典型的な外向きタイプに見える女性でも、異文化の壁の克服には苦労があったようだ。それらをどう克服し、自分自身のレベルアップのために役立ててきたかが読みとれる。その著者が、自身の駐在員妻としての体験や、香港日本人倶楽部でのコミュニケーション講座のプロデュース経験など踏まえて、駐在員家族のメンタルヘルス問題に正面から向き合った。

海外赴任者が良い仕事をできるか否かは、帯同家族が楽しく暮らせるか否かにかかっている。その家族の中心にいる駐在員妻に、ぜひ読んで欲しい1冊である。(N) (19cm、1500円+税、198ページ、2013年4月刊)

『新版 人的資源管理の基本』

■ 白木三秀 編著

■ 文真堂

この本は、人的資源管理のテキストとして2010年6月に発行され3回の版を重ねた旧版を刷新したもので、早稲田大学トランスナショナル

HRM 研究所所長が中心となり11人の専門家が各章の執筆を担当している。

新版では特に業績管理とコンピテンシー、グローバル人材開発、さらには、働くことの意味を歴史的に概観する章を新設することで内容をいっそう充実させている。

同書では、その第1部(2章)はHRMを取り巻く環境、第2部(7章)はHRMのミクロ的視点、第3部(5章)ではHRMのマクロ的視点をそれぞれ取り上げて検討・考察がなされている。また、HRM (Human Resources Management: 人的資源管理)に興味を持つ者が、その視点を確立するために必要な理論や仮説、ロジックが分かりやすく提供されており、大学生、大学院生のみならず、ビジネスパーソンにとっても有益な1冊といえる。(N) (21.5cm、281ページ、2500円+税、2013年4月刊)



『戦略人事のビジョン―制度で縛るな、ストーリーを語れ』

■ 八木洋介、金井壽宏 著

■ 光文社新書

この本の著者は、日本の人事の世界では知らぬ者はいないほど知られている2人だ。世界有数のグローバル企業であるGEの日本法人で人事を極め、現在はLIXILの現役の副社長である八木と、リーダーシップやキャリア、モチベーションの研究で有名な神戸大学教授の金井の2人が、企業とアカデミーの経験と英知を結晶させたのがこの本である。

八木がGEで学んだのは、いかに人事が社員のやる気を引き出し組織を活性化させることで、世界トップクラスのパフォーマンスを引き出しているかということだ。それは一般的な日本企業の人事とは大きく異なるものだった。

「よい会社」で終わらず「強い会社」、「グローバルで勝てる会社」にするには人事は何をすればいいか。その解がここにある。ぜひ、ご一読を。(N) (12.5cm、231ページ、760円+税、2012年5月刊)

